令和５年度 センター研究大会

中学校チーム　研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくり

～対話的な学びの充実につながる校内研究支援～

総合教育センター　中学校チーム

重田　誠（アドバイザー）

藤巻　理恵（アドバイザー）

天野 秀太朗　・　小林 美佳　・　三枝 朋佳

坂本 久美　・　宮下 昌久　・　西谷地力也

山梨大学データ分析ＷＧメンバー

大隅　清陽　・　中込　司　・　田中　武夫

齋藤　知也　・　清水　宏幸　・　安藤　大輔

山際　基

研究の内容

研究推進校における授業改善の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくりに寄与する。

研究の方法

○学力調査の結果を分析し、それに基づき授業者と課題を共有し、協働しながら生徒の実態に沿った授業づくりを推進していく。

○学習会、指導案検討、研究授業、研究会における指導助言の方法や内容等について協議する。

○校内研究会用の振り返りアンケートを活用して検証の手立てとする。

校内研究会用の振り返りシート

双葉中学校　校内研

全職員で振り返り考えるシート

研究主題：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

所属	役職	教科	氏名	研究主題を実現するために 年度当初の考え	研究主題の実現に向けて、今回の校内研を通してわかったこと・気づいたこと・考えたこと等をお書きください。（第3回 校内研） 5月6日　採点講習会	研究主題の実現に向けて、今回の校内研を通してわかったこと・気づいたこと・考えたこと等をお書きください。（第4回 校内研） 6月1日　教科学習会	研究主題の実現に向 いたこと・考えたこ 6月２０日　学習会
					初りを共有することができるとも思った。	業をしていると、つよく引き出せるのではないかとご助言いただけた。	
				教師の意識を変えていくことは、とても大切だと思います。自分ができることから、ひとつでも子どもたちに還元できるものを行っていきたい。	採点から、こどもたちに何が足りないのか、それを補っていくために何が必要なのかということを、自分だけの考えではなく、色々な先生方の意見を聞く中で新たな発見があった。人の意見を聞くことで共感できた。学習だけに着眼を置くのではなく、日々の生活の中からできることを見つけ「小さな事から」コツコツ、子どもたちが自分たちで取り組んでいるという実感がわいてくると、学習に対しても前向きになり、生きていく力もついてくるのかと思った。	「なぜ」を深く考えることは必要だった。子供だけでなく、教員間でも学び合い、相談しながら行うことが大切だと思った	ロイロノートを、 切。使ってみては ると思う。しかし、 担してくれている お金をかけていた
					同じ学習内容の授業でも、その生徒が何に躓き、何を考えているのかを分析し、授業をポイントを変えていく必要があると改めて感じました。数学科として計算だけでなく、専門的な用語や資料を読み解く力をつけていきたいと思いました。	教師が意図的に生徒の考えにずれを生じさせるような発問をすることで、「なぜ」の部分を深く考えていくことができると分かった。授業進度などを考えると、学びあいの時間と教師が教える時間のバランスが難しいが、教師の話の中で、少しでも生徒に考えさせる投げかけが大事だと感じた。	ロイロノートの活 かりやすく提示す し、数学の途中式 いと感じたため、 す。

年度当初と年度末で、同じ内容を問うことで、研究主題の実現に向けた意識の変容がわかる。

研究推進校
【甲斐市立双葉中学校】全校生徒 ４４３名（全１４クラス）/ 全職員　４８名

研究イメージ

双葉中校内研の活性化、研究の推進を図る

双葉中職員

支援の要望、
校内研究推進
のための相談等

支援校のニーズに
合わせた様々な支援
（学習会の講師、教科
部会への参加、学習指
導案への助言等）

学調結果のデータ分析
をもとに、主に授業改
善についての支援

総合教育センター
支援チーム

連絡会議による
情報交換・連携等

山梨大学
データ分析WG

センターと大学の二者が連携して支援を行うことで、
推進校のニーズにより深く、適切に応えられる

双葉中学校の研究の経緯

双葉中学校校内研究主題　R4・R5
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

研究2年目（R5年度）

研究主題の実現のためには、教科授業の充実を図ることが最優先課題であると考え、教科指導に対する教師の意識を改善するために、様々な活動を取り入れてきたが、教科指導の時間だけで、生徒の主体的・対話的な姿の実現は難しく、総合的な学習の時間や特別活動、朝の会や帰りの会における活動等、学校教育活動全体を通して育成する必要があることが反省としてあがった。

令和5年度　双葉中校内研究副主題
～生徒の対話機会の充実を目指した教育活動の工夫と改善～
→学校教育活動全体を通して対話を充実させることで、研究主題の実現を目指す。

双葉中学校の研究支援について

双葉中学校校内研究主題　R4・R5
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

＜R4年度のセンターの支援＞
個々の教員が日常の授業実践において主体的に授業改善に取り組んでいくことを目的とした支援。

令和5年度　双葉中校内研究副主題
～生徒の対話機会の充実を目指した教育活動の工夫と改善～

R4　教師の意識の向上
↓
R5　具体的な授業改善の手立て
（対話的な学びに焦点化）

＜R5年度のセンターの支援＞
双葉中学校が主体性をもって自律的に校内研究に取り組むことを基本とし、「対話的な学びにつながる授業改善に関する支援」を中心に、必要に応じた研究支援を行う。

【主な支援内容】
◎研究主題に関わる学習会　◎教科学習会　◎拡大校内研究会に向けた支援

データ分析WGによる支援

本県学力向上に際し学術的な知見を得ることを目的とし、山梨大学と連携して、全国学力・学習状況調査及び山梨県学力把握調査データ分析作業部会 略称「データ分析WG（ワーキンググループ）」を設置している。

- ６月　山梨大学清水教授(数学)・齋藤教授(国語)
  田中教授(英語)による双葉中の全国学調結果の早期分析
- ８月　全国学調の早期分析結果を踏まえた教科学習会
- ９月　拡大校内研の指導案検討会
- ９月　全国学調の調査結果検討会（質問紙とのクロス集計 等）
- 10月　拡大校内研における指導助言

双葉中の全国学調データ分析を山梨大学の教授７名が行う。

双葉中校内研究の計画とセンター支援

4月　研究のテーマ・方向性の検討 センター
5月　研究のテーマ・方向性の全体共有・研究主任による講義
5月　全国学調早期分析依頼 分析WG
6月　校内研究主題に関する学習会 センター
7月　対話機会の充実を目指した研究討議
8月　全国学調の早期分析結果を踏まえた教科学習会 分析WG
9月　対話機会の充実に向けた実践報告と研究討議
9月　拡大校内研究会に向けての指導案検討会 センター 分析WG
10月　拡大校内研究会 センター 分析WG（研究会における指導助言）
12月　研究のまとめ

拡大校内研究会に向けた支援（随時）

センターによる支援について

校内研究主題に関する学習会

今年度、双葉中が校内研究で目指す「生徒の対話機会の充実を目指した教育活動の工夫と改善」について、センター指導主事2名が学習会を行った。前半は、対話「話し合い」のための土壌づくりとして、相談支援センターの小野指導主事より、生徒が自己有用感を実感することのできる学級集団づくり（学級経営の充実）について講義を行った。

＜講義内容＞
・自己肯定感と自己有用感の違い
・ほめると承認の違い
・行動論的アプローチについて
・構成的グループエンカウンターについて
等

校内研究主題に関する学習会

後半は、合意形成を軸とした話合い活動について、特別活動を中心に、宮下指導主事より、特別活動の特質及び特別活動の構成と指導で留意するポイントについての講義を行った。

＜講義内容＞
・学級活動における学習過程について
・自分たちで考え、話し合い合意形成し、協力する活動について（フリートーク）
・意図のある指導や話し合うことで互いの距離を縮める活動を行うことの大切さについて　等

＜振り返りシートより＞
・学級作り・人間関係作りのヒントを教えていただいてありがたかった
・日頃から一番近くにいる担任が子どもたちと同じ目線にたって、話をする、聞いてあげる、見てあげることが大切だと思った。フリートーク、ぜひやってみたい

分析ＷＧによる支援について

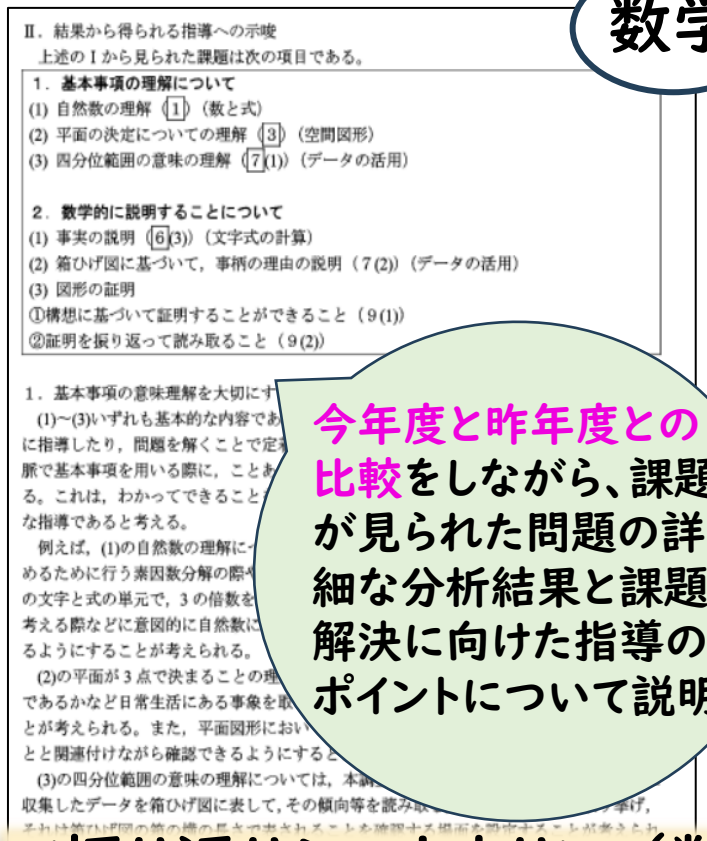
全国学調の早期分析結果を踏まえた教科学習会

数学科、英語科、国語科において、令和5年度全国学力・学習状況調査の早期採点の分析結果について学習会を実施した。山梨大学教授、清水宏幸先生（数学）、田中武夫先生（英語）、齋藤知也先生（国語）より分析結果と授業改善のポイントについての解説、指導・助言をいただいた。各教科で、校内研との関わりも含め、意見交換を行い、10月の拡大校内研に向けて、指導案や今後の授業等について検討した。

国語科は
オンラインで実施

全国学調の早期分析結果を踏まえた教科学習会

各教科の当日の資料の一部



Ⅱ．結果から得られる指導への示唆

上述のⅠから見られた課題は次の項目である。

1．基本事項の理解について

(1) 自然数の理解（1）（数と式）

(2) 平面の決定についての理解（3）（空間図形）

(3) 四分位範囲の意味の理解（7(1)）（データの活用）

2．数学的に説明することについて

(1) 事実の説明（6(3)）（文字式の計算）

(2) 箱ひげ図に基づいて，事柄の理由の説明（7(2)）（データの活用）

(3) 図形の証明

①構想に基づいて証明することができること（9(1)）

②証明を振り返って読み取ること（9(2)）

1．基本事項の意味理解を大切にす

(1)～(3)いずれも基本的な内容であ

に指導したり，問題を解くことで定

脈で基本事項を用いる際に，ことあ

る。これは，わかってできること

な指導であると考える。

例えば，(1)の自然数の理解に

めるために行う素因数分解の際

の文字と式の単元で，3の倍数を

考える際などに意図的に自然数に

るようにすることが考えられる。

(2)の平面が3点で決まることの理

であるかなど日常生活にある事象を取

とが考えられる。また，平面図形におい

とと関連付けながら確認できるようにする

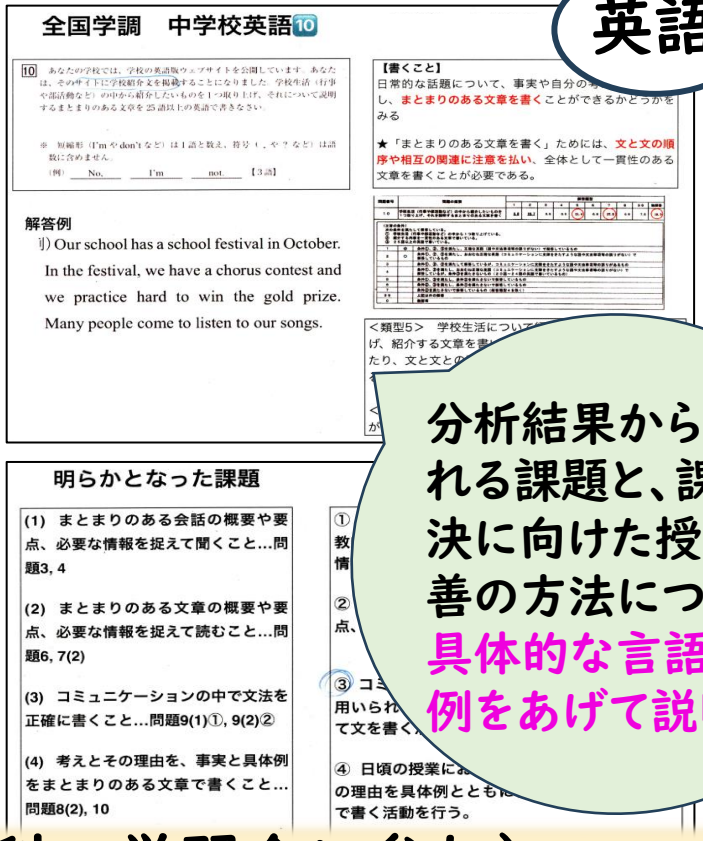
(3)の四分位範囲の意味の理解については，本調

収集したデータを箱ひげ図に表して，その傾向等を読み取

それは箱ひげ図の箱の長さで表されることを確認する場面を学習することが考えられ

数学

今年度と昨年度との比較をしながら、課題が見られた問題の詳細な分析結果と課題解決に向けた指導のポイントについて説明。



全国学調　中学校英語10

10　あなたの学校では、学校の英語版ウェブサイトを公開しています。あなたは、そのサイト上に学校紹介文を掲載することになりました。学校生活（行事や部活動など）の中から紹介したいものを1つ取り上げ、それについて説明するまとまりのある文章を25語以上の英語で書きなさい。

※　短縮形（I'm や don't など）は1語と数え、符号（，や？など）は語数に含めません。

（例）　No,　I'm　not.　【3語】

【書くこと】

日常的な話題について、事実や自分の考えなどを中心に、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる

★「まとまりのある文章を書く」ためには、文と文の順序や相互の関連に注意を払い、全体として一貫性のある文章を書くことが必要である。

解答例

1) Our school has a school festival in October. In the festival, we have a chorus contest and we practice hard to win the gold prize. Many people come to listen to our songs.

<類型5>　学校生活について

明らかとなった課題

(1)　まとまりのある会話の概要や要点、必要な情報を捉えて聞くこと…問題3, 4

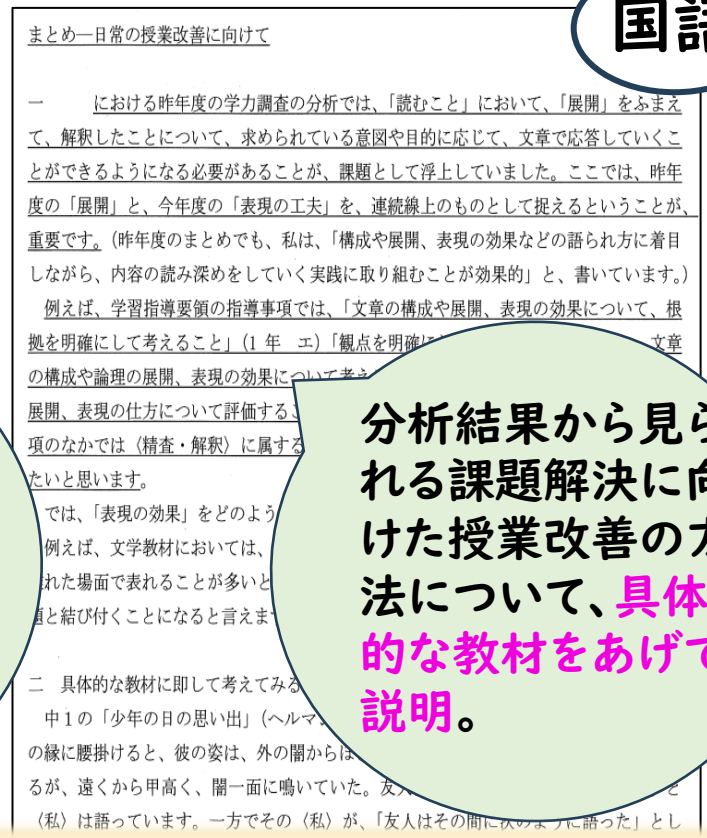
(2)　まとまりのある文章の概要や要点、必要な情報を捉えて読むこと…問題6, 7(2)

(3)　コミュニケーションの中で文法を正確に書くこと…問題9(1)①, 9(2)②

(4)　考えとその理由を、事実と具体例をまとまりのある文章で書くこと…問題8(2), 10

英語

分析結果から見られる課題と、課題解決に向けた授業改善の方法について、具体的な言語活動例をあげて説明。



まとめ―日常の授業改善に向けて

一　における昨年度の学力調査の分析では、「読むこと」において、「展開」をふまえて、解釈したことについて、求められている意図や目的に応じて、文章で応答していくことができるようになる必要があることが、課題として浮上していました。ここでは、昨年度の「展開」と、今年度の「表現の工夫」を、連続線上のものとして捉えるということが、重要です。（昨年度のまとめでも、私は、「構成や展開、表現の効果などの語られ方に着目しながら、内容の読み深めをしていく実践に取り組むことが効果的」と、書いています。）

例えば、学習指導要領の指導事項では、「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること」（1年　エ）「観点を明確に

の構成や論理の展開、表現の効果について考え

展開、表現の仕方について評価する

項のなかでは〈精査・解釈〉に属する

たいと思います。

では、「表現の効果」をどのよう

例えば、文学教材においては、

れた場面で表れることが多いと

と結び付くことになると言えま

二　具体的な教材に即して考えてみる

中1の「少年の日の思い出」（ヘルマ

の縁に腰掛けると、彼の姿は、外の闇からは

るが、遠くから甲高く、闇一面に鳴いていた。友人

〈私〉は語っています。一方でその〈私〉が、「友人はその間に次のように語った」とし

国語

分析結果から見られる課題解決に向けた授業改善の方法について、具体的な教材をあげて説明。

＜振り返りシートより＞（数学科の学習会に参加）

・解答を求める力ではなく、与えられた式やグラフがどんなことを表しているのかを考え、表現する力が必要であること。これは今年度の研究テーマにある”対話”ともつなげられそうな内容である。

拡大校内研究会の授業内容

数学・英語に関しては、全国学調の分析結果から見られた課題に対応する教材、指導事項・内容で研究授業を構成。

特活では、6月の学習会の内容やクラスの実態に合わせて、校内研究主題につながる対話活動を工夫した授業を展開。

学年	教科等
1学年	数学（一次方程式）
2学年	特活（キャリア教育）
3学年	英語（The Story of Chocolate）

拡大校内研究会（１年 数学 単元名「一次方程式」）

～これまでの校内研究を通して～

【全国学調分析結果より】

・与えられた図から必要な情報を適切に読み取ることに課題が見られる。

【指導案検討会より】

・図（グラフ）と具体的な事象とのつながりに気付ける授業を構想する。

与えられた図（グラフ）の意味を考えながら問題づくりに取り組み、方程式を用いて解決することを通して、図と１次方程式のつながりを理解し、その考えを深める授業

図の意味する事象を問題づくりを通して表現し、対話活動を通して考察する中で考えを深めていく。

＜授業者の振り返りシートより＞

研究授業では多くのことが指摘された。生徒同士の対話について、こちらの想定外の発言もあり、柔軟に対応することに難しさを感じた。授業の目標に到達するためには、計画的に時間配分をしてすすめることが必要だが、対話が始まると対話をまとめることができず、時間がかかってしまい、授業が計画どおりにいかなくなることもある。これからの課題だと感じた。

拡大校内研究会（２年 特別活動「キャリア教育」）

～これまでの校内研究を通して～

【校内研究主題に関する学習会・7月校内研究会より】

・お互いの本音を出し合い、合意形成を図る(対話する)ことに苦手意識が見られる。

【指導案検討会より】

・職場体験を学校生活に落とし込み、対話を通して自分の考えを確かなものにしていくことをねらいとしていく。

職場体験の経験をもとに、「仕事をする上で大切なこと、必要な力」を「学校生活のどのような場面で高めていけるか」について、対話を通して考える活動が行われた。

＜授業者振り返りシートより＞

結果的に対話によってつくられる授業を行うことができた。対話をしないと進んでいかないような授業をすることは、不安もあったが、1時間の中で生徒の新たな姿をたくさん見つけることができ、やって良かったなと思えた。対話は特別なものではなく、必要だからこそ仕組んでいくものと思って授業をつくっていきたい。

拡大校内研究会（３年 英語　単元名「Program5 The Story of Chocolate」）

～これまでの校内研究を通して～

【全国学調分析結果より】

「文章の概要や要点、必要な情報を捉えて読むこと」「考えとその理由を、事実と具体例を踏まえてまとまりのある文章で書くこと」に課題が見られる。

【指導案検討会より】

教師-生徒、生徒-生徒のやり取りを重視したReadingの授業改善に取り組む

事実発問・推論発問・評価発問を使い分け、生徒の思考を促す発問を工夫する

英語でのやり取りを通して教科書本文の概要を捉え、印象に残った文とその理由を具体例とともに、まとまりのある文章で書いて伝え合う活動

発問を工夫し、読み取った内容に関する生徒の考えを尋ね、その理由や根拠を書いて伝え合う中で考えを深めたり、表現を広げたりしていく。

＜授業者振り返りシートより＞

指導計画や評価、ワークシートの内容等、細部にわたってご指導をいただき、特に、生徒たちのやり取りがより充実したものになったことを実感した。全国学調における課題分析を基に授業の方向性をアドバイスいただき、常にその課題意識をもって発問内容等考えられたことで、生徒たちの実態に即した、かつねらいに迫ることのできる授業展開にすることができた。

研究支援の成果と課題について

分析WGの研究支援による授業の変化（数学科において）

＜全国学調結果から見られた課題＞

今年度の課題

①基本事項の理解

※必要な情報を適切に読み取ること

自然数、四分位範囲の意味、平面の決定、

②数学的に説明すること

※事実・事柄の説明、図形の証明

昨年度の課題

①数学的な表現を用いて理由を説明すること

②日常の事象と数学の世界を行き来しながら解釈すること

③数学的表現を読み取ること

共通の課題

・数学的な表現を用いて理由を説明すること

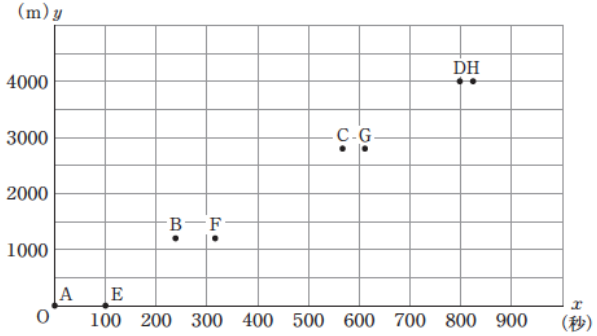
・数学的表現を読み取ること

必要な情報を適切に読み取ること（拡大校内研究会）

前ページの**大悟さんがまとめた表**の記録について、例えば、新緑大学の「316秒」は、晴天大学がスタート地点をスタートしてから316秒後に、新緑大学が図書館前を通過したことを表しています。

大悟さんは、晴天大学の6区の選手がスタートしてからの時間をx秒、6区の選手が走った道のりをy mとし、前ページの**大悟さんがまとめた表**をもとに下のようなグラフに表しました。点Aから点Dが晴天大学、点Eから点Hが新緑大学を表しています。

6区の選手の記録のグラフ

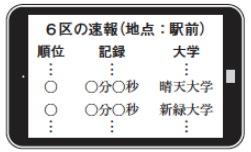


次の(1)から(3)までの各問いに答えなさい。

(1) 晴天大学が駅前を通過した時間と新緑大学が駅前を通過した時間の差は、上の**6区の選手の記録のグラフ**に表された点Aから点Hのうち、2つの点のx座標の差に表れます。点Aから点Hまでの中から、その2つの点を選んで書きなさい。

8 大悟さんが住む地域にある新緑大学は、大学対抗駅伝大会に出場します。この駅伝大会では、コースを7区間に分け、1区から7区までをリレー形式で走ります。大悟さんは、新緑大学の6区の選手の応援に行きました。6区の道のりは12000 mあり、6区のスタート地点では、晴天大学が先にスタートし、新緑大学がその100秒後にスタートしました。

大悟さんは、インターネットで6区の速報を見て、新緑大学が晴天大学に追いつきそうだと考え、その地点を予想することにしました。



そこで、大悟さんは、晴天大学と新緑大学の6区の各地点の記録を、晴天大学の6区の選手がスタートしたときを0秒として、下のような表にまとめました。

大悟さんがまとめた表

地点	スタート地点からの道のり	晴天大学	新緑大学
スタート地点	0 m	0秒	100秒
図書館前	1200 m	238秒	316秒
郵便局前	2800 m	567秒	611秒
駅前	4000 m	798秒	824秒

山梨大学清水教授分析

指導に当たっては、点Dと点Hのy座標はスタート地点から駅前までの道のり、x座標は駅前を通過する時間をそれぞれ表しており、2点のx座標の差は二人の選手が駅前を通過した時間の差であると捉えられるようにすることが大切である。さらに、他の2点の組も同じように捉え、x座標の差の変化について検討することが考えられる。

分析WGの研究支援による授業の変化（数学科において）

＜先生方の意識の変化＞

・分析結果を日々の授業改善に生かそうとする意識が高まった。

・教科学習会で、分析結果をもとに今後の数学科として授業改善の方向性を議論することは、教材観や指導観の向上につながる重要な機会であるという認識が高まった。

＜日々の授業の変化＞

・教科学習会で題材づくりを学んだことで、日々の授業で問題の数値や条件・場面を変えたりするなど、生徒の実態に合わせて問題を作成するようになった。

・授業の導入において、生徒が問題を自分事として考えられるように、問いの工夫を行い、これまで以上に生徒の興味関心を高める授業づくりを心がけるようになった。

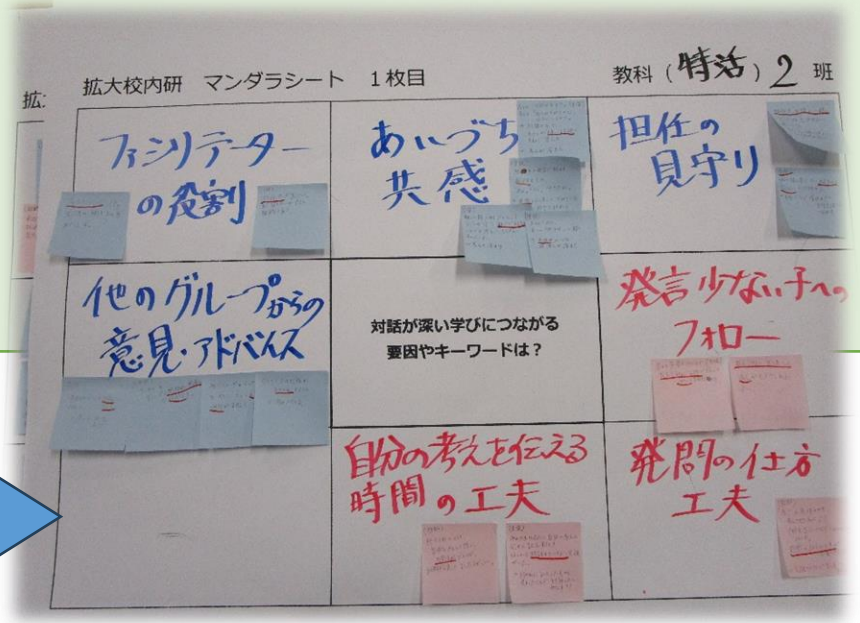
・経年的な課題である数学的に説明する問題を定期試験に入れるなどして課題改善の状況を確認するようになった。定期試験後は、誤答から生徒のつまずきを見いだし、課題の見られた問題を取り上げて解説したり、日々の授業を再度見直したりするようになった。

研究支援による校内研究の変化（研究主任より）

話し合いの手法についての資料提供や実際の校内研での思考ツールを用いた演習を通して

- 話し合いの手法について学んだことで、**校内研における協議方法を工夫するようになり**、先生方同士で行う協議の質が高まった。
- 演習を通して学習会等を仕組む側の視点を学んだことで、**より質の高い学習会の運営ができるようになった**。
- 一部の教師だけではなく、学校全体で**思考ツールを授業で生かす**場面が増えた。

拡大校内研究会の研究協議時にも思考ツールを用いて協議を行った



研究支援による校内研究の変化（研究主任より）

学習会等の実施を通して

・5月に「生徒が自己有用感を実感することのできる学級集団づくり」についての講義を聴くことで、対話そのもののみに注目するのではなく、対話の土台づくり（安心安全なクラス環境・集団づくり）の意識も高まり、その後の研究につながった。

・教科学習会を通して、主発問や対話をどう仕組むのか、生徒の課題を把握するために分析結果を生かそうとする意識が生まれた。課題が明確であることで、普段の授業の授業構成や課題設定に生かすようになった。

・指導案検討会等による大学教授やセンター指導主事を含めた公開授業の検討を通して、授業観や教材設定の意識など新たな知見を得ることができた。学校での教科部会だけでは、深まらない部分が深まった。

研究支援による校内研究の変化（研究主任より）

研究主任とセンター担当指導主事による様々な校内研究の実施に関わる打ち合わせ等を通して

- 研究主任１年目としては、校内研究の進め方について見通しをもつことができた。
- 講師の相談、講師の招聘等は研究主任だけではなかなかできないため、専門性のある先生の学習会を通して、研究の質が高まった。
- ２年目は、１年目の経験を生かして研究のビジョンが明確に描けるようになった。
- 校内研究の素地づくりや前年度の課題を踏まえた継続的な研究をすることができたので、先生方一人一人の校内研究に対する意識の向上につながった。

本年度の校内研究を通した教師の変容（振り返りアンケートの記述より）

振り返りアンケートの変容

研究主題を実現するために ＜年度当初の考え＞
なんとなく使っていた（あまり使っていなかった？）対話という言葉を今後，考えて使っていきたいと思う。

5月　研究のテーマ・方向性の全体共有・研究主任による講義

対話という言葉をこれまであまり使っていなかったので、意味を理解した上で使っていきたいと思う。

対話に対する理解の深まり

双葉中学校で目指す対話について自分なりの理解をしている

6月　校内研究主題に関する学習会

自己有用感という言葉をはじめて聞いた。自己肯定感よりも、他との関わりが強い言葉のように感じた。対話的な活動を仕組む中で、自己有用感の獲得、向上につなげていきたい。

対話に対する新しい知見の広がり

対話を生み出すためのベースとなる学級づくり・集団づくりについて考えを広げている

7月　対話機会の充実を目指した研究討議

対話にはある程度のスキルが必要だと感じた。良い対話にしていくためのスキルを獲得させる方法についても考えていきたい。ファシリテーターは難しい役割だなとあらためて感じる。

対話に対する新しい知見の広がり

よりよい対話を生み出すためのスキルについて考えようとしている

＊ 赤の表で示した回はセンター（分析WG）が支援を行った回

本年度の校内研究を通した教師の変容（振り返りアンケートの記述より）

8月　全国学調の早期分析結果を踏まえた教科学習会

対話の場面をどのような形で授業の中に仕組んでいくか、様々な方法があることを感じた。また、対話がスムーズに進んでいくように、生徒の思考をどのように「見える化」していくかもポイントになると感じた。

対話に対する考えの深まり

実際の授業を想定する中で、どのように対話を仕組むのか具体的に考えている

9月　対話機会の充実に向けた実践報告と研究討議

正解が対話の出発点という話が印象に残った。ついつい、対話を通して正解にたどり着かせようと考えてしまう。そうではなく、対話を通して正解をどこまで深く掘り下げていけるかという視点を持とうと思う。

対話に対する考えの深まり

対話を深い学びにつなげるための視点について考えている

10月　拡大校内研究会（授業者）

対話によってつくられる授業を行うことができた。対話は特別なものではなく、必要だからこそ仕組んでいくものと思って授業をつくっていきたい。

対話に対する考えの深まり

授業における対話の意義について再確認するとともに、これからの授業に対する展望をもっている

研究主題を実現するために　＜今年度の研究を終えた時点での考え＞

対話機会を充実させることで，生徒の考え方や価値観がより深くなっていくことを感じた。ただ，無理にその機会を作ろうとするのではなく，1つの手段として対話を使っていければいいんだと思う。有効な場面で対話を取り入れていきたい。

また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて対話機会の充実を意識するようになった。対話の価値が少し実感できたことで，自分自身がワクワクしながら授業づくりができている。

センター研究の成果と課題

【成果】

・前年度の課題を踏まえた継続的な研究をすることができたので、先生方一人一人の校内研究に対する意識の向上につなげることができた。
・学習会を通して、対話の土台づくり（安心安全なクラス環境・集団づくり）の意識を高めることができた。
・教科学習会を通して、主発問や対話をどう仕組むのか、生徒の課題を把握するために分析結果を生かそうとする意識を高めること（経年的な課題を定期試験に入れるなど）ができた。

【課題】

・今年度は、学校と検討する中で、教科を限定して授業改善の支援を行い、一定の成果を得ることはできたが、直接支援していない教科については授業改善の状況の把握が不十分であった。来年度以降は、学校全体で授業改善を進めるための支援を行っていきながら、それぞれの教科につなげられるような支援を行っていきたい。

ご清聴ありがとうございました

【資料】アンケート結果

6月　校内研究主題に関する学習会

振り返りアンケート内容より

〇対話をするためには、人間関係ができていないと難しい。学級作り・人間関係作りのヒントを教えていただいてありがたかった。

〇対話をするために必要なこと。人間関係の構築、知識、理解力。自分の役割。

〇学級づくりに関してのお話の中で、自己有用感を育てていくことの大切さを改めて感じた。自尊感情を育てるのはなかなか難しいと思う。大人もそうですが。自分は必要とされているという感覚を少しでもクラスの中で感じてもらえるよう仕組んでいくことがとても大切だと思った。そのためには、日頃から一番近くにいる担任が子どもたちと同じ目線にたって、話をする、聞いてあげる、みてあげることが大切だと思った。フリートーク、ぜひやってみたい。

〇学級づくりにおいて自己有用感を高めていくことが大切だと改めて感じた。周りとの関わりを増やすことが、自己有用感を高めるきっかけになるのではないかと考え、もう一度「対話」に目を向ける機会となった。

本年度の研究の中心となる「対話」について、対話を生み出すための前提ともなる集団づくりの重要性について再認識していることがうかがえる。

次回の校内研究で、実際どのようなことが学校生活の中で仕組めるかについて考えていく。

7月　校内研究会（対話機会の充実を目指した研究討議）

振り返りアンケート内容より

○対話をさせる上で、どのようなやり取りや展開を目指すのか、そのためにはどのような工夫が必要か、教師の効果的な役割は何か、など考えさせられた。

○対話を仕掛けるために、まずやってみることが大切であると思った。また、経験から人の意見を聞くこと、そこからどう考えるか、ということも大事であると考えた。答えが一つでないものほど、様々な対話が生まれると思った。

○対話をさせるには、「適切な課題設定」が必要であるということである。現実社会と同じで、答えがない、または複数あるような問いで、生徒が少しでも「相手の考えも聞いてみたい」と思うような問いをどのように仕組むかを考えることがとても重要であると感じた。

○課題設定をどのようなものにするべきか考えさせられた。また子どもたちが対話する中で、お互いに疑問を感じたり、整理したりするために、考えたことを言語化する力が必要であると感じた。

○対話を成立させるために、自由な発言が許せる雰囲気や、発展的に答えを出すという雰囲気が作れるようにしていきたい。

6月の学習会を受け、日頃の自分自身の実践を見つめ直し、対話を通した、授業改善の視点を一人一人の先生方が考えていることがうかがえる。

2学期の研究授業を通して、具現化していく。

対話機会の充実
＋
主体性を生む効果的な課題設定
↓
対話的な学びの充実
↓
研究主題の実現

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

8月　教科学習会

振り返りアンケート内容より

○全国学調の解説をしていただいた。表現の工夫・効果について、普段の授業で取り入れていきたいのは山々だが、どうしても内容把握を優先してしまう。ある程度の学力がないと、表現の工夫・効果について理解するのは難しいように思う。

○感じたことは「事実・命題・方法を説明する力が必要である」ということだった。解答を求める力ではなく、与えられた式やグラフがどんなことを表しているのかを考え、表現する力が必要であること。これは今年度の研究テーマにある”対話”ともつなげられそうな内容である。教え合いになりがちな教科の授業を、「この解にたどり着くまでにどんな方法が考えられるか」と問い方を少し変えるだけで、これまでとは全く違った授業展開や学調の結果が得られるのではないかと感じた。

○普段の授業を振り返ると、「相談タイム」という名の下で、分かる人が分からない人に教え、分からない人は、分かる人に聞く。そのような流れでしか数学の授業を展開できていないので、「どのように求めることができたのか」、言葉が出づらい質問だが、出づらいからこそ、課題に上がる訳なので、普段の授業から意識して問う機会を設けたいと感じた。

○田中教授と総合教育センターの三枝先生に拡大校内研で授業を行う岩田先生の指導案検討に協力していただいた。授業の中でどのように対話機会を設定していけば良いのかアドバイスをいただいた。

学習会で得た新たな知見を、自分の普段の授業と照らし合わせて考え、2学期の授業に生かそうとしていることがうかがえる。

2学期の授業を通して、具現化していく。

参加者アンケートより

- 研究１年目の課題を発展させた研究内容になっていたと思う。また、研究内容が対話に焦点を絞ってあり、先生方にも研究が浸透して、研究を深めることに繋がったことが伝わってきた。
- １年生数学では、対話を引き出すのに良い課題であったと思った。現在担任している6年生が比例のグラフを学習していて、グラフの読み取りの大切さを感じた。
- 対話的な学びの土台としての学級作りの重要性を再認識できた。
- 多くの生徒が意欲的に活動している様子が見られ、他者の意見を取り入れながら自己形成・自己実現に向けての取組を考えられる授業になっていた。
- 本校でも対話的な学びをどう深めていくかについて考えるための良い機会となった。
- 対話を通し、考えを深めたり、根拠を明確にしたりするためには、教材の提示の仕方、教師の問い返しなどが大切になると改めて感じた。
- 学級の雰囲気や教師と生徒との信頼関係、生徒同士の繋がりなど、対話の基礎となるものがしっかりしていると、より深い対話が可能だということもわかった。